
モノクロセカイ

相沢識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロセカイ

【Nコード】

N7633G

【作者名】

相沢識

【あらすじ】

『モノクロセカイ』それは世界であり、全てである。青年、神崎レオは『白い空間』で目覚める。胸にぽっかり開いた喪失感と虚無感。それを埋める為、彼は記憶を探す。

第一話 神崎レオ

『レオ!』

高いソプラノの声が俺の名前を呼んだ

俺は緑色の原っぱの上で上半身だけ起き上がらせていた

後ろを向くと俺の名前を呼んだと思われる女の子が手を振っていた

見覚えがあるのに思い出せない

知っているのに俺にはその子の顔が見えない

視界に残像が映りこんでぐにやりと歪む

待ってくれ俺は、

俺はその子の顔が見えないのに笑ってるような気がした

*

気が付くと俺は倒れこんでいた

耳には穏やかな声とギイギイと椅子が揺れる音

頭にひどく残る頭痛に苛立ちを感じた

ここはどこだ?

「じじじはっ……」

頭痛をこらえて辺りを見回す

真っ白な世界

影さえも白色に塗りつぶされるような白しか存在しない空間
身に覚えのない場所

人はいないのだろうか？

「起きましたか？」

突然、自分以外の声が響いた

慌てて後ろを振り向けば、白いログチェアに座る優男

その男は俺に穏やかな笑みを向けた

何処か謎めいた男

乾いた唇を開き、問う

「……ここは、どこなんだ？」

「ここは…大切な『何かを』失った者がくる…空虚な空間です」

この男が何を言っているのか分からなかった

話している事は分かる

だけど…現実的にあり得ない

ぐるぐると頭の中で彼の言葉が回る

「混乱するのも分かります。ですが、じきに嫌でも分かります」

「？」

彼の顔が真剣なものに変わった
「なんだ、と思う前に足元にあった床がなくなる」

「!？」

浮遊感があり、そう俺は落ちていた
「自分の顔が青ざめていくのが嫌でもわかった」

「ちよっ!」

優男は落ちていく俺に相変わらずの柔らかな笑みを向ける
「何だって言うんだ？」
「真っ白な空間から一変、真っ黒な」
「長い長い浮遊感に吐き気と目眩を覚えた」
「ただでさえ頭の中が混乱しているのに更に頭の中がごちゃ混ぜにされる」

そして地面に体が叩きつけられる

そして次に目がおかしくなったのか、と疑問が浮かんでくる
「目に写る全ての情景が白、黒、白、黒」
「起き上がって、辺りを見回す」
「地面は砂漠のような砂、これは白」

空は太陽がない空、これは黒

ここはどこだ、

無機質でただひたすら無の場所

白い砂漠の地面を踏む

地面の感触はやはり砂を踏んだような感触だった

爪先に何かがあたり、飛ぶ

砂に埋もれたそれを取り上げる

「携帯…？」

白い砂を払う

四角い液晶画面には暗い光が灯っていた

旧型の黒いボディの携帯「最近では色々な携帯が発売されているが俺は今更新しくするのもどうかと思わずとこれを使っていた」
そしたらアイツが

5

『今時そんな携帯持つてんのレオだけだよ』

今のは何だ？

映像のようなものが頭の中を駆け抜けた

アイツ？アイツって？携帯？俺は自分の名前しか知らなかったんじ

や？あの頭の中に駆け抜けた映像の女の子は？

ぐるぐると頭の中に回る疑問

だけれどこれは俺の…記憶だ

パズルのピースを一つ埋めたような感覚

彼女の顔を思い出す

暖かい真昼の日差しのような笑顔

いや、？俺は：彼女の顔が わからない

見えなかった、

見えないのだ彼女の顔が霞がかかったように

どうして俺が彼女が笑ってると思ったのかはわからない

だけど笑っていたのだ

そう、笑っていた

確信と、胸の中に満たされる暖かさ

右手で携帯を握り締める

パソコンが起動されたような音が耳に入る

振り替える

そこには白い無機質な機械

これは？

長方形のような形のものが真ん中に地面にどっかりと埋まっており
自分の身長のご二倍はある全長

そこから伸びる無数のチューブ

チューブには色とりどりの色がついており、チューブの先には大中小の四角い液晶が爛々と光っていた

こんなものは見た事がない

いや、忘れていただけなのかもしれないが

そして一つの液晶画面にと言つ文字が浮かぶ

そして瞬く間に無数の液晶に伝染するかのようにと言つ文字が浮かぶ
チカチカ光る液晶画面

そしてそれが一瞬でプツリと消えた

疑問に思い、何かわからないものに近づく――

地面の感触を確かめ、近づく――

触れようとした瞬間、液晶画面が真っ赤になりと言つ文字が浮かぶ――

いやな予感が胸に過る――

続いてサイレンのような音が辺りに鳴り響く――

思わず目と耳を塞ぐ――

鳴りおわる、俺はそつと目を開ける――

何ら変わらないモノクロの風景――

いや、？違和感――

背中に何か突き抜ける――

じわり、脂汗が滲み出る――

視界には黒い何か――

冗談じゃない、本当に黒しかないのだ――

例えるならそう自分の影が普通に立っているのだ――

黒い何かはかろうじて人型だとわかる――

その黒い何かは口も鼻も髪も耳も腕も足も全部それが判断できない――

ただ目と思われるものが2つポツカリと開いていた――目と思われる――

ものが爛々と赤色に光っており、俺を捕らえた――

その赤には充分過ぎる程の殺意があつた――

第一話 神崎レオ（後書き）

初めまして…！相沢識と申します。

初めて書いた（投稿した）小説がこのモノクロセカイであります。

暇つぶしになれたら嬉しいです。

本文だけならまだしも後書きまで読んで頂きありがとうございます。

勿論、本文だけを読んで下さった皆様もありがとうございます。

次回更新は何時になるかわかりませんが、生ぬるい目で見守って下さい。

第二話 黒い獣

その黒い塊は赤い目をギョロつかせその視線を俺に捕らえる
そしてそれは白い砂漠を蹴りあげる
ジェット機のように背を低くして俺に向かってくる黒い塊
突然の事で身体が動かない、そして次の瞬間左肩に激痛

「ぐっ!？」

ハッキリとは見えなかったが、その黒い塊は俺に突進してくる前に
跳躍し、黒い塊が裂け、足と思われるものをつくり、俺の左肩狙い
踵落としをしてきた

激痛としか言いようがない肩の衝撃

まるで金槌で叩かれたみたいだ、肩が外れてなければいいが…
って何で俺はこんなに冷静なんだ

俺は黒い塊から距離を取るため、黒い塊がない方向に走る

そして白い砂漠に刺さった瓦礫の後ろに隠れる

いつの間にか乱れていた息を整える

カタカタと震える身体、今になって恐怖を感じる

「…何だよ、何なんだよこれは………」

これは後味の悪い悪夢か?

いきなり、見ず知らずの場所で目覚めて、よくわからない場所に落とされてこれは何だ――
現実味のない世界、空を仰ぐ――
太陽も月もない黒い空、今が朝か夜かもわからない――気がおかしくなりそうだ――苛々してきて地面を蹴る、スニーカーが白い砂で汚れる――
そして背中に刺さる殺気、冷や汗が流れる――
瓦礫から目だけを覗かせる、そこには足と思われるものでこちらに歩いてくる黒い塊――
汗をかいた右手で拳を作る、そして手の中に何かあるのに気付く――

「……携帯」

携帯の液晶が鈍い光を放つ――
液晶には時間や日にちはない、そのせいでどの時間帯なのか分からない――
ない――
衝撃――

「なに、」

パラパラと舞う砂――
瓦礫が木っ端微塵に崩された――
後ろを振り向けば爛々と光る赤――
空を切る黒く細長い足と思われるもの――
身体を横にずらし、二撃目は避けられた――
黒い塊が来た方向、あの白く無機質な機械の方向に逃げる――

白い砂が絡み付き走りにくい――

取り敢えず考え事をしてられる程、余裕ではない――

白い無機質な機械から伸びる無数のチューブ――

その先には大中小の大きさの液晶画面――

液晶画面は光を失い、何も表示されていない――

思わず蹴りたくなった――

そもそもアイツは何故俺に襲い掛かってきた、あれは何だ、この白い機械が原因か？

無機質な機械を見上げる、白い機械は俺の背の何倍もの高さにある――

ザリ、砂を擦る音――

振り向けば、黒い塊――

再び繰り出される踵落とし――

それを白い機械を盾に避けるが、黒い塊は急に足を寸前で止める――

「？」

そして静止する――

どうやら黒い塊はこの機械は壊せないらしい――

ならばこれを盾に避け続けねばいいのだが、それではコイツを倒せない、どうすればいい――

その瞬間、白い無機質な機械の一つの液晶画面が白い光を放つ――

それに感染したように数個の液晶画面も白い光を放つ――

眩しさでよく見えなかったが、その液晶画面には『起動』の二文字――

『ギヤイアアア！？』

「！？？」

耳に障る奇声」

黒い塊が叫んだものらしい、そもそも声帯があるのかもわからないが」

視界がやっと晴れて、黒い塊を見ればそれはもう黒い塊ではなく、ボロボロと崩れ落ちる黒い砂と化していた」

黒い砂は白い砂と混じり、モノクロを生み出す」

液晶画面はチカチカと鈍い光を放ち、『停止』の二文字を表示する」途端に身体力が抜け、白い砂漠に身体を預ける」

くらくらする頭、目蓋が視界をどんどん遮る」

そこで思考が止まる」

「……………真昼」

それは誰が呟いた言葉なのか今となってはわからない」

第三話 白い空間

ギイコ、ギイコ

ブランコを漕いでいるような音が耳に入る

重たくなった目蓋を無理矢理開ける

視界を染め上げるのは純白で無機質な白

どうしようもない孤独に襲われる

「起きましたか？」

穏やかな声、聞き覚えのある声に飛び起きる

辺りを見渡せば俺の目の前に茶色いログチェアに腰をかけ、本を読んでいる優男

その男は容姿、声と同一の穏やかな笑みを俺に向ける

その笑みを見た瞬間感情が爆発した

「！」

空を殴る自分の拳

目の前の男を殴るはずだった自分の拳は空振りする。後ろを振り向けば何ら変わりなくログチェアに座っている優男の姿

さっきまで俺の目の前に居た筈なのに

睨み付けても、その男は笑みを浮かべるのを止めない――

「……怒るのはわかりますが、それよりも聞きたい事が貴方にはあるでしょう?」

「……………」

腕を下げる――

そうだったな、右手を握り締めれば手の中に固い感触――

「話が長くなりますから座ってください」

途端に現れる椅子と机――

それは魔法のように現れたのではなく、まるで元からあったような感覚がする――椅子に腰をかける、机には二つのカップとティーポット、それからミルクや砂糖――

「さて、では何かから答えしましょうか?」

「じゃあ……………ここは何だ?」

「ここは…前にも言った通り、大切な何かを失った者がくる…空虚な空間です」

「だから、それが何だと聞いているんだ」

「私にもよくわかりませんが、貴方は何かを失った節があるのでは？」

「……何の話だ」

「ここは普通の人間が来るところとは違う、と言う事は理解できませんよね」

「……まあ」

二つのカップに注ぎ込まれる透明なオレンジ色の液体

湯気が漂う。ここは人の気配がしない、まるで何もなみみたいだ

「まあ理解出来なくてもいいのですが、ただ『ここがそうゆう所』だと思ってください」

「あなたはこここの事を知っているんじゃないのか」

「私にもわからない事はあります、そして私も……何かを失った人間ですから」

「……」

カップの一つを差し出される

優男はカップに口をつけ、話を一度中断する「一瞬だけだが、この男が悲しそうに眉を潜めたのが見えた」

「私が話す事、理解しなくてもいいです。ただ受け入れて下さい、この世界がそうゆう所だと」

「……わかった」

思わず頷いてしまう自分「もっと言いたい事はあった筈だ」
満足そうに微笑む優男

「次に私が貴方を送り込んだ先の説明ですが、あまり期待はしないように」

「ああ」

「私が貴方を送り込んだ先は、所謂と呼ばれている世界です」「景色が全て白黒だったな」

「ええ、その点からモノクロと呼ばれているのでしよう。そして貴方が遭遇した、黒い塊」

「……何で知っている」

「私が送り込みましたから」

湯気が止まる

やはり、コイツに気を許す事は出来ないらしい

「モノクロセカイと黒い塊は共通の関連性があります。モノクロセカイはいわばパソコンのような働きをします。全てのプログラムが保存してある場所がモノクロセカイと言う訳です。そしてプログラムが何かと言うとわれば人間です」

「人間……？」

「信じられないかもしれませんが、聞いて下さい。地球は2000X年を過ぎた時から地球に住んでいる人間は何らかの衝撃で肉体全てがプログラム、データになってしまったのです」

何だ、それは、現実味なさすぎだろ――

だけど冗談ではないだろう、男の目が真剣そのものだったからだ――

「モノクロセカイは地球の一部。人間のプログラムを管理する場所、つまり第二の地球と考えて下さい」

「そんな事聞かされて信じられると思うか？」

「これは夢じゃありません、現実です。続けます」

「……」

「そして何故人間がそれに気付かないか、ですが。それは当たり前です何故ならいくら肉体がプログラム化しても人間の生活リズムが変わった訳ではないですから」覚めたカップに口をつける――

夢か？これは悪い夢か、俺が目を覚ましたら元の日常が広がってい

るのだろうか？

「呼吸し、食物を摂取し、行動する、それは肉体がプログラムになった今でも変わらない日常」

「じゃあ……何で人は死ぬんだよ人間がプログラムだったら修復すればいいだけの話だろ」

「実は人間が新たに生まれた瞬間、その人間には最初から幾つで死ぬか寿命が決まっているのです。何故なら多くモノクロセカイが人間のプログラムを長く保管していれば容量が一杯になりモノクロセカイが壊れてしまう危険性があるからです」

「……人を物みたいに」

「物ですよ、人間は、地球にとって」

穏やかな微笑みに浮かぶ冷淡な冷たさ、目がそれを語っていた

「そして次に、貴方が会った黒い塊ですが、あれは元は人間だったものです」

「は……」

「寿命を終えた人間は削除されますが、何らかのトラブルで削除し損ね、あの黒い塊なつたと推測されます。バグ、と呼んだ方がいいかもしれませんね」

「……」

「そしてバグは自分の肉体を求め、さ迷います。そしてプログラムの肉体を持った人間を見つければ肉体を求め、襲い掛かります。バグは様々な形に自分を変えます。人間だったり、動物だったり、あるいは……自分の一番大事な人だったり、ね」

「！」

心臓を鷲掴みされたような感覚」

優男は特に気にも留めない」

どうして、自分はこんなにも動揺したのだろうか」

「まあこれは全て私の推測ですが」

「……何故推測だけでそこまで詳しくわかる」

「あくまで推測、ですから」

「……」

有無を言わさぬ声」

背もたれに背中を預ける」あまりにも現実味のない話、ではどうやって俺がこの場所にいるか、あのモノクロの世界は何なのか、を説明が出来ない」

「私の名前はルシファーと申します」

差し出される白い手

不快感を与えない穏やかな微笑み

今は、コイツの言ってる事を受け入れるしかないのか
手を握る

「……神崎レオだ」

『大丈夫、一人じゃないよ』

聞こえた声

俺の脳裏に響いて離れない

第四話 戸惑いと決意

『取り敢えず今日は休んで下さい』

『……………』

『疲れたでしょうし、それに色々整理したいこともあるでしょう。この部屋は自由に使ってもらってかまいません。……………では、よい夢を』

『……………あぁ』

この白い空間と言うものは一つの家みたいなものらしい――
何個かの部屋に分かれている、その一室が俺の部屋らしい――
廊下と思わしきものも、扉と思わしきものも、全部が白――
これでどうやって自分の部屋と見分ければいいのか――
そう考えながら、案内された部屋のドアノブと思わしきものを捻る――
……………想像していたものとだいぶ違っていた――
床を踏み、中に入る――
壁や床は白だが、さっきの部屋とは違う家具があった――
クローゼットやベッド、テーブルに椅子――
色は白だが、温かみのある白――
それは天井につけられた蛍光灯のおかげかもしれない――
視界の端に写った白いカーテン、そこから薄らと窓が見える――
気になり窓を開く、そこには真っ黒な形からして三日月が宙に浮いていた――

それ以外は地面も木も花も空も何もなく、白で塗り潰されている――
気が可笑しくなりそうだ、白と少しの黒しかない世界――
幻覚か、これは？――
窓を閉め、ベッドに倒れこむ――

「……………はあ――」

自然に漏れたため息――
正直頭の整理がつかない――今まで普通の日常を過ごしてきたんだ、
そう今日も――？――

「今、俺……………」

思い出せない――
分からない――
段々苛々してくる――
枕に顔を埋める、もう寝ようと思う――

*

とある白い空間にて――

『おー、あれが俺の生まれ変わりか。俺に似てなかなか美形じゃな

いか』

『……………性格は正反対ですがね』

『ハハッ、そうだな……………アイツは守れるのかな』

『……………』

『一番大事なものは何があっても手元に置いとくものだ』

『……………そうですね』

『これはルシファー、お前にも言っているんだぞ』

『……………はい』

『……………ルシファー』

『何でしょうか?』

『嫌な予感がする、そうまるであの時のような……………』

ブチッ

テレビの電源が切れるような音が白い空間で反響する――
ルシファーはログチェアに座ったまま、宙に浮いたモニターをじっと見つめた――

モニターには映っていた映像はなく、砂嵐だけが映っていた――

ルシファーが右手の指を軽く動かせば、モニターは白い空間に溶け込むように消える」

「……………貴方の言っていた事はこの事ですか？」

ルシファーは眉間に皺をつくりながら呟く「

誰かに話し掛けるように」

「……………ですが、もう二度とあんな事はさせません」

ルシファーは決意を胸に焼き付け、白い空間に溶け込むように消える」

黒い三日月が笑っていた」

第四話 戸惑いと決意（後書き）

約二ヶ月以上の放置申し訳ありません！

別作品でも同

じような事言っていた気もしますが、そこは気にせず！

二ヶ月以上放置していたにも関わらず後書きまで見てくれてありがとうございませう。
次の投稿も早かったり、遅

かったりしますが気長に見てくれれば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7633g/>

モノクロセカイ

2011年1月16日14時28分発行